

テレビのスポーツ実況中継におけるカット切り替え後の見どころ候補提案連鎖

劉礪岩 (NICT 研究員)

1. はじめに

カーレースのテレビ中継では、しばしば次の断片1のようなシーンが見られる。テレビ画面の映像が予告なく切り替わり、それまでとは別の競技車両が映し出される(図1→図2)。その直後に、アナウンサーと解説者は同時に「あつ」と驚く(10, 11 行目)。

断片1 (2018-01) アナウンサー: J 解説者: Y, P * 「【C】」はカット切り替えが起きたタイミングである

07 Y .hh 昨日の()真逆な::[状態が起きつつある(.)のような気がします=面白そう【C】ですよ。

08 P [そうですね:.

09 (0.4)

10→J [↑あ:::とと RUNUP: !(.)クラッシュ: !

11→Y [↑(あ/お)とと:



図1(断片1カット切り替え直前)



図2(断片1カット切り替え直後)

カーレースは、競技車両が広い競技場に散らばって高速で走行するため、競技中の出来事をテレビの視聴者に見やすい大きさと提供するためには、競技場全体を一望するのではなく、見どころがありそうな車両に焦点を絞って追従して撮影する必要がある。また、多数の競技車両が同時に競争するため、レースの見どころとなる映像も競技場のあちこちに散在しやすい。そのため、断片1のようなカット前後の映像が異なる競技車両を被写体とする切り替えは、レース全体を通して繰り返し生じる。本報告では、このようなカット切り替えの後に生じるアナウンサーと解説者のことばのやりとりを相互行為の視点から考察する。次の断片2がその例である。アナウンサーGが05行目の発話を始めた直後に、画面が図3の映像から図4の映像に切り替わり、その後Gは解説者Yを名指して、新たに映し出された競技者の1人である「本山」

断片2 アナウンサー: G 解説者: Y, F

05 G でそ【C】のうし(0.5)あつとこちらGT::500クラスです..h(え)〈本山〉(1.0)その後から RAYBRIG=

06→ =本山も:>由良さん<良いんじゃないですか?>これ<

07⇒Y [いやすごく良いですね::.

08 (0.7)

09 G 早くもギャップを広げているこの[本山です。



図3(断片2カット切り替え直前)



図4(断片2カット切り替え直後)

選手に対する自身の見方を差し出し、反応を求める(06行目)。それにYが応じる(07行目)。Gの06行目の発話を、暫定的に「見どころ候補の提案」と呼ぶことにする。これまでの実況研究(たとえば岡田, 2002; 是永, 2012; 劉 & 細馬, 2017)では、このような発話連鎖を対象とした研究は行われていない。そこで本発表では、この発話連鎖を事例分析する。

2. データについて

データとするのは、「Super GT」という日本で行われるカーレースである。出場車両約40台がエンジン出力によって「GT500」(約15台)と「GT300」(約25台)の2クラスに分かれ、同時に同じコースを混走し、それぞれのクラス内で順位を争う。実況は、アナウンサー1人と解説者2人計3人で行われる。2人の解説者のうち、1人はプロレーサー、もう1人はレースのエンジニアを本業とする。対象のやりとりを書き起こし、コレクションを作成し、分析した。

3. 分析

問題の発話連鎖を分析するにあたり、まずテレビ画面の映像とカット切り替え自体の性質を考えなくてはならない。テレビ画面に映し出されているのは、同時に走行している約40台の競技車両から選び出された数台である。ほかではなく、その数台が選び出されているということは、少なくともその時点においては、ほかの競技車両よりも視聴者に見せるに値するということができる。また映像が切り替わるということは、それまでの映像を断ち切ることであり、この意味でも切り替え後の映像は、何らかの意味でレースにとって重要であり、わざわざ視聴者に見せるに値するものと考えられる。実際、断片1ではカット切り替え後の映像は、「クラッシュ」という緊急事態であった。であれば、カット切り替えの後、アナウンサーと解説者は映像から見どころを見つけ出すという課題に直面することになる。

カット切り替え後の映像は、2種類に分類することができる。タイプ1は、断片1で見たような、見どころが一瞥してすぐに分かるものである。断片1の場合は、アナウンサーと解説者はまず「↑あつと」と驚くことによって、切り替え後の映像に反応し、同時に切り替え後の映像の見どころは、ほかの通常走行をしている車両ではなく、イレギュラーな部分であることを示している。次に、アナウンサーが「クラッシュ」という表現によって見どころを定式化している。タイプ2は、断片2で見たような、一見すると通常の走行シーンに見えるものである。本報告の記述対象となる発話連鎖は、すべてタイプ2の後で生じている。だが、タイプ2の後に対象の発話連鎖とは異なる特徴を持ったやりとりも観察される。次の断片3がその例である。

アナウンサーTが図5の映像に映っている車両に言及した後(01行目)、画面が図6の映像に切り替わり、通常走行している2台の車両が映し出された。これに対して、Tはまず「さあ」という区切りをつける間投詞によって反応し、次に「これ」によって映像内の状況を指し、「立川」選手の車両が先行の車両に迫ってきていると述べる(03行目)。この発話によって、Tは切り替え後の映像をただの走行シーンではなく、「立川」選手が先行車両に迫っているものとして構造化し、視聴者に提示していることが分かる。

断片3(2010-2) アナウンサー:T 解説者:Y, L

01 T ガライヤを追うのがRX7 谷口。【C】

02 (2.8)

03→T さあそしてこれ迫ってきますね。ZENT 立川が迫ってきているぞ:

04 (1.2)

05 Y そうですね。(1.4)

06 いや:ぼくは:(.)ガア:と逃げちゃうのかなと思ったら意外と:そんな楽な戦いはしてないですね[.:



図5(断片3 カット切り替え直前)

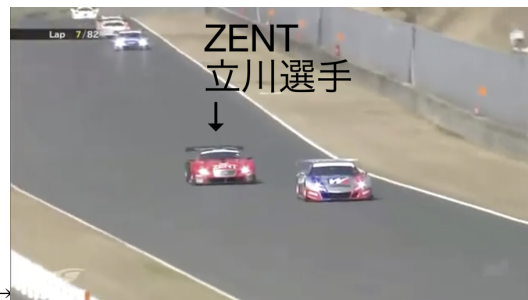


図6(断片3 カット切り替え直後)

断片3におけるTの見どころ提示と比較すると、断片2の切り替え直後のアナウンサーGの発話(05行目)が異なる特徴を持っていることが分かる。Gは「あっと」という間投詞を発した後、「こちら」という指示表現によって切り替え後の映像を指しているものの、次に述べたのは映し出された車両のクラス(GT500 クラス)、選手名(本山)とチーム名(RAYBRIG)、およびそれらの映像内での配置(その後)である。つまりGは映像の見どころそのものではなく、まず何の映像を見ているかに関する情報をアナウンスしている。見どころに先行してこのような情報提供が行われることは、ほかの事例(4, 5)でも見られる。

では断片2では、映像の見どころがどのように特定されたのだろうか。Gは映像内の2人の競技者の1人である「本山」選手に対する「良いんじゃないですか?」という見方を、Yに差し出している(6行目)。評価語「良い」は、すなわち「本山」選手が何らかの意味で優勢であると聞くことができ、これによって、Gは切り替え後の映像の見どころ候補を提案し、それに専門家である解説者Yに対して承認を求めている。実際Yが「いやすごく良いですね」と承認を与えると(07行目)、Gは「早くもギャップを広げているこの本山です」と見どころをアナウンスしている(09行目)。その一方で、この評価は、本山選手のどの部分が、どのように良いかといった詳細を欠き、その意味で「大雑把」ということができる。この特徴によって、解説者は単に承認するだけでなく、むしろ映像に対してより詳しい見方をしているのなら、それを反応で述べるのが適切である。この点については、次の断片4を見てみよう。

図7の映像から図8の映像に切り替わると、アナウンサーSはまず映し出された車両のクラス、順位、選手名といった情報提供を行い(3, 4行目)、次に、そのうちの1人である「金石年宏選手」が良いという見方をYに差し出す(05行目)。

断片4(2013-1 0:34:59) アナウンサー:S 解説者:Y, F

01 S その【C】後に:(.)ベンツ GAINER DIXCEL の姿も見えます。

02 (0.6)

03 S sさて:(1.5)トップはGT500:MOTUL AUTECH GTR

04 .h二番手EPSON HSV .h HSV の隊列三台です=KEIHIN がいて RAYBRIG

05→ これはでも:金石年宏も KEIHIN がですね:由良さん, 良いいですね:[.]

06⇒Y [はい。 [これは行くでしょうね:]

07⇒ でも:まあ道上選手(も)よく頑張ってますね (>これは<)<くる-(.)苦しいと思いますよ。

08 S [お-

09 S 抑える道上:(.)後から金石年宏:(0.3)[このヘアピンは後につくだけです。



図7(断片4カット切り替え直前)

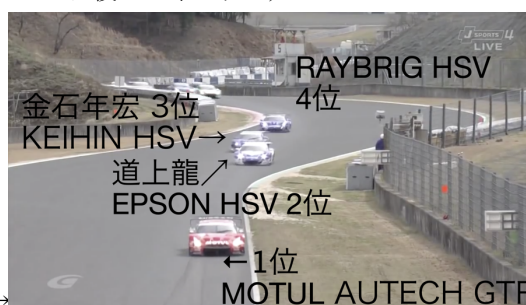


図8(断片4カット切り替え直後)

それに対して、Yはまず「これは行くでしょうね」という「金石選手」に関する予想を述べる(04行目)。これによって、Sの提案した見どころに対して承認を与えるだけでなく、映像により具体的な見方を与えている。そして、Yはさらに「でも:まあ」と逆接し、前を走る「道上選手」について、「よく頑張っている」と述べ、「苦しいと思いますよ」と続ける(05行目)。これによって、Yは現在の映像を、単に「金石選手が優勢」と見るべきだけでなく、「道上選手も苦しいながら頑張っている」という見方を示している。つまりYはSの提案した見どころ候補を承認した上でさらに補足し、専門家としての見方を提供している。それに対して、Sは「抑える道上、後から金石年宏」というふうし、Yの補足を取り入れた定式化を行い、切り替え後の映像の見どころをアナウンスしている(09行目)。このように、見どころ候補の提案が「良い」のような大雑把な評価語であることによって、解説者から専門家としての見方を引き出していることが分かる。

アナウンサーの見どころ候補の提案に対して、解説者は承認以上のことを述べないこともできれば(断片2)、予想を述べたり補足したりすることもできる(断片4)。この意味では、アナウンサーの候補提案は、解説者にとって応答しやすくデザインされている。なぜこのようなデザインがなされているかを考えるために、次の断片5を見てみよう。33行目の末

尾でカットが切り替わり、切り替え後の映像内の2台の車両について、アナウンサーJが35, 37行目で情報提供を行う。しかし続くはずの見どころ候補の提案を待たずに、38行目から解説者Pが後追いの「HOPPYが(先行車両)に食らいついている」という見どころを提示し、続いてもう1人の解説者Yも補足する(39行目)。

断片5(2018-01) アナウンサー: J 解説者: Y, P

33 J これはレクサス勢同士の争いということですね 【C】

34 (1.5)

35 J さあ:, 300に画面変わりました。

36 (1.3)

37 J GAINER: TANAX GTR(.) トップそして後からはHOPPY[86:

38 P [あ: 結構HOPPY食らいついてますね: .

39 Y そうですね: .(.) やっぱり小さく回り[ますね : :]

つまり解説者は必ずしもアナウンサーの提案を待っているだけとは限らず、自ら見どころを提示することができる。であれば、アナウンサーが見どころ候補を提案する前に、解説者にも潜在的に見どころを提示する機会があり、それが断片2と4では利用されなかったということになる。だからこそ、アナウンサーは見どころ候補を提案する際に、解説者の意見の不確実性を高く見積もり、答えやすいよう発話をデザインしていると考えられる。

4. むすび

カット切り替えは、アナウンサーと解説者に映像から見どころを見つけ出し、視聴者に提供するという課題を課す。この課題に対して、見どころ候補提案連鎖はその準備として用いられる。このことは、特に解説者による応答の後の、アナウンサーによる見どころのアナウンスから見やすい。このアナウンスは視聴者を主たる受け手とし、たとえ断片4のように補足を受けた場合であっても、それを明示的に解説者に向けて反応するのではなく、暗黙裡にアナウンスに反映しているにすぎない。このような仕方によって、解説者が応答において専門家として述べた意見は、映像の見方として視聴者に屈折されているということもできる(deflect, Clayman & Heritage, 2002)。

活動において、アナウンサーが率先して課題に取り掛かっているだけでなく、解説者を名指して明示的に反応を求めたり、解説者の意見を視聴者に屈折させたりできる。これらの特徴は、アナウンサーの司会者的な役割(三宅, 2004)に対する志向と見ることができる。しかし解説者も常にアナウンサーの先導を待つのではなく、自己選択によって課題の解決に参加できる(断片5)。一方、見どころの特定においては、多くの場合解説者にその権限があるように見えるが、これは、解説者の競技の専門家的な性格に対する志向と見ることができる。しかしアナウンサーも確信があれば、解説者に承認を求めることなく見どころをアナウンスすることがある(断片3)のみならず、解説者が応答しやすいよう、候補提案の発話をデザインしている。つまりアナウンサーと解説者はそれぞれが持つイニシアティブと権威に志向しつつも、そのみに依拠しておらず微妙に交渉がなされている(串田, 2017)。この交渉のあり様をさらに詳らかにすることを今後の課題とする。

参考文献

- Clayman, Steven & Heritage, John (2002). *The News Interview: Journalists and public figures on the air*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 是永論 (2012). メディア上の表現行為をどのように分析・評価するか: スポーツ実況放送を事例に 日本マス・コミュニケーション学会 2012 年度秋季研究発表会研究発表論文
- 串田秀也・平本毅・林誠 (2017). 会話分析入門. 勁草書房.
- 三宅和子 (2004). スポーツ実況放送のフレーム -放送に向けられた視聴者の不快感を手がかりに- 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰(編) *メディアとことば 第1巻 「マス」メディアのディスコース*, pp. 94-126. ひつじ書房
- 劉礫岩・細馬宏通 (2017). カーレース実況における発話による出来事の指し示し - 「こ」系指示表現と間投詞「ほら」の相互行為上の働き- 質的心理学研究, 16, 46-62.
- Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel, & Jefferson, Gail (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4), 696-735.
- 岡田光弘 (2002). スポーツ実況中継の会話分析 橋本純一(編) *現代メディアスポーツ論*, pp. 163-195. 世界思想社